

布哇王國皇帝の明治天皇との御密談について

——大東亞共榮圈の首唱——

難波江 通 泰

布哇王国皇帝の来朝

『元老院日誌』明治十四年三月三日の条（第二百号）に、

布哇国皇帝来遊勅任官問安

達議長幹事議官
へ太政大臣 今般布哇国皇帝陛下渡来ニ付着京ノ上右旅館延遜館へ尋問可致此旨及通達候也

とあり、同月五日の条（第二百十一号）には

布哇国皇帝着勅任官問安ノ儀接伴掛通牒

通牒書記官宛
接伴掛 布哇国皇帝陛下本日延遜館へ御到着相成候ニ付テハ明日ノ内御院勅任官ノ向陛下為尋問同館へ

御参向名刺御差出有之候様早々夫々へ御伝達有之度此段申入候也

追テ本日新橋停車場へ被出向候面々ハ不及其儀且所勞ノ向ハ接伴掛へ宛断書御差出有之度候也

とあり、ついで同月十四日の条（第二百三十二号）には、

布哇国皇帝発程勅任官謁刺ヲ呈ス

達勅任官へ
太政大臣 布哇国皇帝来ル十六日延遜館御出發ニ付明十五日午後第三時ヨリ同五時迄ノ内ニ同館へ参向名刺可

差出此旨及通達候也

追テ御出發当日新橋ニ於テ奉送ノ向ハ不及其儀候也

とあつて、布哇国皇帝の来朝に関する『元老院日誌』の記載は、この、勅任官への延遜館に於ける奉送迎の大綱の通

達三箇条であるが（元老院の設置は明治八年四月）、これを遡る十二年前の明治二年七月二十二日、英国ヴィクトリア女王の第二王子エデンバラ公アルフレッドの来朝があつた。それは、外国の王族の我が国への来航最初のことであつて、特に、その接伴、警衛には非常な苦心と配慮が払われた。そしてその際、延遼館を修補して同王子の宿泊所にあつたのであつた（同月二十四日に延遼館に誘引）。而して翌月の八月九日、明治天皇は浜殿（後の浜離宮）に行幸、延遼館を巡覧遊ばされた。その後、来朝の各国の王族はこの延遼館に宿泊、また、各国の公使等もこの延遼館で酒饌を賜ふることになった。

やがて明治十四年三月、布哇国皇帝が来朝され、『元老院日誌』の記載の通り三月五日に延遼館に到着されたが、同皇帝の日本（横浜港）到着はその前日の三月四日であつて、その夜は伊勢山離宮（横浜御用邸）に宿泊せられ、そして、翌五日に延遼館に入られたのであつた。しかも、先の英国王子アルフレッドの来朝は、外国の王族（王子）の最初の来朝であつたが、今回の布哇国皇帝の来朝は、外国の皇帝来朝の嚆矢であつた。皇帝は、この三月五日より十六日までの十二日間を延遼館で過ごした後、神戸、西京（京都）、大阪、長崎を巡遊されて清国（上海）へ向われたのであつた。が、皇帝の日本訪問の目的は何であつたのか。また、当初の予定、日本滞留三日間を、十日以上も延期、滞在されたのであつたが、その間（滞京期間中）に、如何なることが存したのであつたらうか。

ハワイに於ける東郷元帥尊崇

去る一月十五日、高千穂商科大学教授名越二荒之助氏来訪され、著書や、ビール、清酒などの恵投を受けた。ビー

ルの名前は「東郷平八郎提督」。産地はフィンランド。シベリア鉄道で日本に直送されたものである。清酒は「乃木之誉」。乃木將軍に因んだものである。その由来は同氏の著『反日国家・日本』に詳しいが、元帥の偉名は赫々として、今日なほ、遠くフィンランドに語り継がれ、同国民の尊崇の的となっているのである。

又、トルコに於いても、感動を以て今日に伝承され、長男に「トーゴー」、次男に「ノギ」と命名する人の多いことを、毎日新聞特派員や辻政信氏などが伝えているが、その他、河崎一郎氏の『素顔の日本外交』などにも見られる如く、ポーランドやハンガリーなど数箇国に於いてもこれと同様のことが見られている。

又、大宅壮一氏も『炎は流れる』の中で触れて居られるが、戦前、わが国の委任統治領であった内南洋諸島、パオ、ヤップ、サイパンなどの島民達には姓はなく、名前だけであった。その中には「ナポレオン」「ピスマルク」「ワシントン」など、古今東西、世界の英雄と同名の人が何人もいたが、中でも、親しい日本人の姓や名前を、日本人同志が呼びあっているサン、づけ（敬称）のままで自分の子供に命名した為に「イトウサン」「イチロウサン」などが沢山居り、しかもその人達を呼ぶときには、更に敬称のさん、づけで「イトウサンさん」「イチロウサンさん」と呼んでいたが、中でも特に多かったのが東郷元帥、乃木大將をそのまま名前にした「トーゴーゲンスイさん」「ノギタイシヨウさん」達であった。

また、ハワイでは、特に、東郷元帥は絶対的な存在であった。大宅氏は

東郷が「浪速」艦長としてハワイを訪れたときにも同じような現象がおこった。そのころ生まれたハワイの原住民のこどもには、トウゴウ、ナニワ、エイユウなどという名前がさかんにつけられた。またトウゴウということばが、「超人」とか「偉大」とかいう意味にも用いられた。

と記している。具体的な内容に関しては省略するが、禮砲や満艦飾を断乎として拒否した処置と言い、脱走邦人を、威嚇や脅迫に屈せず、敢然として保護した態度と言い、その毅然とした風格はハワイ島民に非常な感動を与え、全島民の尊敬と憧憬的となったのであった。その事件は、明治二十六、七年のことであるが、先に触れた布哇^{ハワイ}国皇帝の来朝は、これより十二、三年前のことであり、また、この諸島がキャプテン・クックによって発見された当初は ^サSandwich^{ンドウイチ} 諸島と名付けられていた。

Sandwich

ロンドンの南郊、すなわち、シティの南およそ四マイルの地点に、英国で最も古く公開された、ダリッチ・カレッジのピクチャー・ギャラリー（ダリッチ美術館）の所在地として有名な Dulwich の地区があり、又、シティの東南およそ四マイルには天文台で有名な Greenwich があり、東南東八マイルには士官学校で名高い Woolwich の地区があるが、これらの語尾にはいづれも wich が附いている。

又、ケムブリッジの東の地帯に、北から南にかけて、Norwich, Ipswich, Harwich と、やはり語尾に wich の附く町が続いて居り、カンタベリーの真東、ドーヴァー海峡に面した海岸にも、同じく wich で終る地名 Sandwich がある。

OED に ^サSandwich は The name of the town of Sandwich, Kent. とあり、また wich は Place names of salt-making towns. とあり、その地名辞典に ^サwic on sandy soil. The meaning of wic is probably 'market town'.

とあるので Sandwich は「塩^{しほ}浜^{はま}の市場町」という意味と思われるケント州の地名であるが、その第四代目の領主が、後に海軍大臣になった搏打好きな伯爵、ジョン・モンタギュー (John Montagu, Earl of Sandwich) であつて、パンの一種のサンドウィッチの名が彼に基いていることは周知の通りである。当時の英国人は本名を呼ばずに、地名で以てサンドウィッチ伯爵と呼んでいた。我が国でも羽柴秀吉を「筑前殿」と呼び、松平信綱を「智慧伊豆」と呼んでいたのと同様の現象であらう。

ハワイの島は、アメリカ革命の最中の一七七八年一月十八日にキャプテン・クックが発見（実は再発見）したが、この英国海軍大佐ジェームズ・クックのパトロンが、サンドウィッチの領主、ジョン・モンタギュー伯爵であつた。クック船長は、発見したこの島に後援者の名をとつてサンドウィッチ諸島と命名した。が、それは長くは使用されず、原地語の「ハワイ」が一般に使用されて今日に及んでいる。また、今では伝説以外には、このハワイという言葉の意味は不明になっている。(Sandwich を仮名書きでは一律にサンドウィッチと記した。諒承願ひたい。)

カメハメハ王直系の断絶

クック船長が発見してサンドウィッチと命名した当時、この諸島は四つの王国に分かれていたが、その中心の島はハワイであつた。そして、そのハワイ島の主導権をめぐつて王族相争うこと十年、激戦の末、フランスでは大革命狂乱の最中の一七九一年、カメハメハ一世が支配権を確立し、五年後の一七九六年に全諸島を統一した。クックのハワイ発見十六年後のことであつた。が、クックの発見により、ハワイ諸島は欧米列強諸国の注目するところとなり、ア

メロカ、イギリス、ロシア、フランスなどの各国は貿易の促進、商工業の近代化、キリスト教の伝道などを名目に、ハワイ侵略の魔手を伸ばして来た。

しかるに、その不運なる百余年の歴史を暗示し、悲惨なる終末を予告するかの如くに、欧米列強侵略の爪牙を眼前に見ながら、一八一九年、ハワイ統一二十三年にしてカメハメハ一世は世を去った。因に、この年は、イギリスがシンガポールを領有した年でもあった。カメハメハ一世を失ったハワイ王国では再び王族間に争いが生じて、欧米列強のハワイ侵略に更に有利な条件や機会を与え、益々、これに拍車を加えることとなった。

しかも、年を追って増加する外国人の来航者は、恐るべき悪性の病気をこの国に移入した。世に、十三世紀は癩病、十四世紀は黒死病、十五世紀は梅毒と言っているが、これらの病気の上に、更に麻疹や天然痘や虎列刺までもが加わり、それらが同時に波打って、次々とこの島に押し寄せて猛威を振った。その為に死亡者が激増し、ハワイの人口は年毎に激減して行つた。殊に癩病——ハワイ人は、これをマイ・パケ（支那病）と呼んでいるので、支那人がこれを伝染させたのであらうと言われている——が非常な勢いで流行し、ハワイ全島を恐怖と不安の島と化して行つた。

しかもあらうことか、国王のカメハメハ五世（カメハメハ一世の孫）がこの癩病に感染して亡くなり（一八七二）、一七九五年のカメハメハ一世の即位より三世七十七年でこの王室の直系は断絶した。カメハメハ五世には嗣子がなかったのである。

ルナリロ王

そこで、王族の一人、カメハメハ一世の姪の子で、カメハメハ五世の甥に当るウイリアム・C・ルナリロが、同じく王族の一人、カメハメハ一世の従兄弟の子孫であるデイヴィッド・カラカウアと王位を争い、アメリカの勢力を背景に持ったルナリロが選ばれて王位に即いた（一八七三）。この時、組閣された新内閣の閣僚は、ただ一名を除く以外は総てアメリカ系の人物であつて、その中の二名はキリスト教の宣教師であつた。⁽¹⁾すでにこの当時、アメリカの勢力が如何にハワイに浸透していたかを知ることが出来るであらう。が、この新王国ルナリロは肺結核によって、在位僅か一年と二十五日にして他界した。

不運なる星のハワイ王国

そこで、再び新国王を選ぶ為に、イギリス側は、カメハメハ一世建国の際に功績のあつたジョン・ヤング（イギリス人）の孫娘で、故カメハメハ四世の王妃であつたエムマ王太后を、アメリカ側は今度はカラカウアをそれぞれ後援して、国会で投票の結果、カラカウアが三十九対六の絶対多数で当選した。が、イギリス側や島民達が選挙に不正行為ありとした為に暴動が各地に発生した。そこでアメリカはホノルルに碇泊中の軍艦から水兵を上陸させ、その援護によって新国王カラカウアは即位式を挙行することが出来た（一八七四）。

その結果、アメリカはハワイに於いて強大な勢力を有することとなり、直ちにその翌年（一八七五）、アメリカはハワイと通商条約を締結してこれを事実上の保護国とした。

先のカメハメハ五世も、前国王のルナリロも、王位継承者を未決定のままで亡くなった為に、その直系は断絶したのであった。そこでカラカウア新国王は、直ちに王弟のレイオホフを王子として王位継承者に任命したが、不運なる星の下なるハワイ王国は、クックに発見せられてより百年、欧米列強諸国の侵略を眼前にしながら、何故か、不幸の連続に呻吟しなければならなかった。ハワイ王国の将来を担うべく王位継承者に任命されたこのレイオホフ王子も、カラカウア王の配慮にも拘らず、在位四年にして先にこの世を去ったのであった。

欧米人のハワイ侵入

欧米人のハワイ侵入。それは毛皮の取引から始まった。アメリカ人やイギリス人達は、ガラス玉や、鉄の破片や、毛布などをアメリカインディアンの毛皮と交換し、それを広州の市場で、絹や、茶や、陶器などと取引きすれば歴大な利益を得ることを知っていた。彼等はハワイの毛皮に着目して毎年来航し、これを多数入手しては広州に運び、莫大な利益を上げていた。ロシアもハワイに手を伸ばしてカウアイ島に反乱を起させ、それに乗じて広大な土地を領有し、大砲を備えて要塞を作り、ロシアの国旗を翻えした。怒ったカメハメハ一世はこれを取壊した為にロシアの野望は消え失せた。当時、フランスは大革命の動乱の最中で、この時はハワイとは関係を持たなかった。また、イギリスは、利益が多いにも拘らず、毛皮の取引きを扱わない東インド会社が東洋貿易に当たっていた為、これもハワイ

の毛皮とは關係を有さなかった。残るところはアメリカであつて、この毛皮貿易はアメリカの独占するところとなつてゐた。

ところが、また、ハワイの諸島には香木の白檀が多数生育していることを貿易船の者達は知つた。それは支那や印度では高貴なものとして尊重され、その国の人々はこれを得る為には多額の費を惜しもうとはしなかった。而してこの白檀の莫大な利潤を独占したのもアメリカであつた。アメリカと支那の中継地がハワイであり、アメリカの貿易船は必ずハワイに寄航した。当時、白檀は一ピクル（約八〇キログラム）を九ドル前後でアメリカが買い、その三倍、四倍の値段で支那に売り、そして支那の安い商品を買つて、それを非常に高い値段にしてハワイに持ち込み、それを白檀の代金の肩代りに支払つていたので、アメリカの業者は二重の利得を得ていたのであつた。しかし、毛皮獣も、白檀も、濫獲と濫伐によってその数は急激に減少して行き、白檀の産出は、当初は年額四〇萬ドルであつたものが、五十年後の一八三五年には十三分の一の三萬ドルに激減した。

そうした頃、それに代るが如くハワイ（主としてホノルルの街）を賑わしたのが捕鯨船の来航であつた。電気もガスも無い時代、燈火としての鯨油の需要は大きかつた。また当時、女性のスカートには軟かい鯨の鬚の使用が流行し、その必需品となつてゐた。しかも大西洋の鯨は捕獲し尽され、その漁場は太平洋へと移つて來てゐた。一八一九年（カメハメハ一世他界の年）、一隻の捕鯨船がホノルルに現れ、その年は計六隻に終つたが、翌年には三十隻以上が、そして一八二二年には一度に二十四隻がホノルルに入港し、最盛期の一八四五年には五百隻近くがホノルルに寄港休泊したが、その四分の三以上の三百八十隻近くはアメリカの捕鯨船であつた。

かくしてハワイの島々には、従来の貿易船に加えて多数の捕鯨船が来航し、非常な輻輳、殷賑を極めたが、その船

員や業者は、利慾、慾望の爲には、何を行うかも知れぬ入墨の無法者、無頼の徒であり、年毎に増加するこれらの来島者が、ハワイに恐るべき数々の悪質な病氣を伝播、感染、流行させ、飲酒、淫靡の惡風をも齎したのであった。しかも、国王や酋長達は奢侈、贅沢を求め、島民も懶惰、放逸に慣れて收拾すべくもなくなつて行き、その惡弊はハワイを経済的な窮乏に陥れた。

ハワイでは、土地は国王の所有であり、酋長達はそれを分ち与えられ、更にそれを島民に分ち与えていた。移住者（外国人）に対しても同様であつて、一旦、国王が必要とあれば返上しなければならず、それに対して抗弁、抗争することは絶対に許されなかつた。これが、ハワイに於ける土地法であつた。

毛皮や白檀などの資源の減産と、奢侈と怠惰に慣れたハワイでは、負債は増大する一方であつた。が同時にハワイは、「カリフォルニアの砂糖壺」とも化しつつあつた。それは後年、アメリカの関税（重税）と糖業者（アメリカ人）の問題を惹起して、ハワイ王国を滅亡に導く要因の一になるのであるが……。甘蔗がハワイで栽培されていることはクックの『航海日誌』にも記されているが、それが企業化されたのは一八三五年であつた。となると、その耕地、すなわち広大な土地が必要であり、当然、土地の利権と外国人企業家の投資が問題となつて、それは前記の土地法に波及することになって来る。ところが、それを進歩であるとし、近代化であるとして歓迎したのが国王や酋長達であつた。そして土地法は改正され（一八四八）、一八五〇年から島民も外国人も一樣に個人の土地所有権が認められ、又、政府の所有地も島民に払下げられたが、島民達はこれをアメリカ人に売却して行つた。しかも、政府払下げの土地も、島民売却の土地も、いずれもその価格は驚くべき安い値段で取引され、非常な廉価で、欺くが如くしてアメリカ人はこれを獲得して行つたのであつた。かくしてハワイに於けるアメリカ人は巨利を博し、ハワイに於ける繁榮と

発展の基礎を確立するのであるが、これを画策、推進、断行したのは、当時のハワイ政府の首脳部であった。ハワイでは首相以下すべての大臣は欧米人によって占められ、その殆んどがアメリカ人であり、その中の二名はキリスト教伝道者であった。⁽²⁾この二名のみならず、アメリカからは多くの伝道者がハワイに渡来して、特に甘蔗栽培で巨萬の富を得た。中でも有名なのが「キャッスル・アンド・クック有限会社」を設立したアモス・スター・クックとサミュエル・キャッスルの二人で、彼等は搾取と蓄財を事としてハワイの五大財閥の一に数えられたのであった。一八五一年三月、ハワイ駐在のアメリカ外交代表シヴァランズが、

ハワイで営まれている事業の四分の三はアメリカ人の経営で、彼等の有する不動産は莫大なものである。
と言ひ、バーバーが、

彼等は、島民達に聖書^{バイブル}を与へて、土地を盗んだ。

と言ひ悪評を引用して、

これらの白人がハワイの土地を獲得した手段に至っては、これ以上の恨みを以て綴られた訴論はまたとない。

と言っていることは、ハワイの土地をアメリカ人が如何にして獲得して行ったかを物語る有力な論評であると言わなければならない。

また、フランスは一八三九年に、カトリック教をハワイに導入しようと、武力で以てこれを承認させ、イギリスは一八四三年に、不完全ではあったが、二月二十五日からおよそ一箇月間、ハワイを併合したのであった。

露骨なるアメリカの野心

これら欧米列強のハワイに於ける利権の獲得や条約の締結、カトリック教の伝播などは、総て、砲火、武力を背景に、これを威嚇、脅迫して強制せしめたものであった。而してアメリカのハワイ領有の野心は執拗なものであって、一八五三年（嘉永六年）はペルリが浦賀に来航した年であるが、その九月二十一日、國務長官マアシイはハワイ駐劄アメリカ公使グレッグに、

ハワイは近き将来に外国によって併合されるか、或は、その保護の下におかれることは明らかである。アメリカはハワイが他国の有に帰することは欲しない。故に、場合によっては、ハワイの統治権を取得せよ。

との訓令を發した。そして翌年の四月四日には、ハワイ併合条約締結を交渉すべく訓令を發し、それは成立しなかったが、その中に、併合後のハワイは、アメリカ合衆国の一州 (State) とする。という一条が謳われていたのであった。

一八八一年は明治十四年で、ハワイ王国皇帝来朝の年ではあるが、また、大東亞戦争勃発の昭和十六年よりは、丁度、六十年前に当る年でもある。その十二月、ハワイ駐劄アメリカ公使に与えた國務長官ブレーンの訓令は、

ハワイはその位置から見て、北太平洋に於ける軍事上枢要の地点を占めているから、同島の占領は全くアメリカの国策上の問題である。……ハワイをアメリカの一部にしてしまふには、アメリカとハワイの密接な結合が必要である。

と言ひ、更に、

ハワイは、アメリカの制度に同化合一すべきものであって、それは、自然の法則であり、政治的な必要から命ずるところのものである。

と、アメリカがハワイを領有することは当然の帰趨であるかの如く、露骨に、且つ、高圧的にこれを言い、続けて、
ハワイは、太平洋に面するアメリカ領土の鍵鑰ケンヤクとも称すべき位置にあるが故に……（中略）……ハワイの中立保持が困難に立ち到つた場合は、アメリカ政府は、その当面する重大問題に対して断乎たる処置をとり、局面の変化に対処することに躊躇しない。

と、明確に、ハワイを占拠し、これを領有化する意志の存することを表明しているのである。

毛皮、白檀、捕鯨、甘蔗など山産海物の宝庫、更にはその拠点として、欧米列強は利慾を争つてハワイに蟬集し、蚕食の限りを尽したのであったが、今また、それは重要な軍事基地であるとして、アメリカの更に窺視するところとなつたのである。かくの如くにして、命運、明日を予測し難く、情勢、薄氷を履むが如き中にあつて、明治十四年の早春、ハワイ王国皇帝は日本を訪られたのであった。

布哇国皇帝の明治天皇との御密談(一)

吉森実行氏は『ハワイを繞る日米関係史』に、

此の年（明治十四年）の初め、国王カラカワは世界歴訪の途に上り、一行は明治十四年三月四日、日本に到着し

た。わが国では之を国賓として上下をあげて歓迎を惜しまず、王もまた満足の意を表した。この日本訪問……（中略）……の蔭に、今日、秘史として次の物語が伝へられてゐるのは、当時ハワイが如何に王朝の断絶を憂へていたかを察するに余る。

と述べ、その秘史に関しては、「ハワイ公文書保管局蔵・渡辺七郎『布哇歴史』より引用」として、アームストロングの『カラカワ王世界旅行随伴記』の關係箇處を記された。それによれば、

ここで突如としてわれわれ随行員を驚かし、恐懼せしめた事件が起った。この日国王は一言のお話もなく、日本天皇陛下の侍従と二人で 天皇の宮殿にお出でになったのである。国王はかねてわれわれを絶対に信頼して居られたのであるから、この御秘行は到底理解し得ないことであつた。

国王は帰館の後も、 天皇陛下との御会見の目的に就いては何ら触れられるところなく、すべて秘密にするやうにと命令された。併し、日本天皇に於かせられては、これは国家の問題である。故に之を井上外務卿に告げられ、またわれわれ随行員も此の問題を予め知っておくべきであるとの御意見で、 天皇陛下は侍従をわれわれのところへ御差遣になつて、右の始末を簡単に報告せしめられた。しかし詳細に亘る内容は、われわれがハワイに帰国するまでは全然発表せられなかつた。

ハワイに帰り、われわれが知つたところは即ち次のやうである。

カラカワ王はポリネシア民族の考へ方から、日本皇室とハワイ王族との間に婚姻關係を成立させようと計画されたのである。国王はアメリカ合衆国が、近き将来にハワイ王国を征服するかも知れぬ、と言ふ危惧を抱いて居られた。故に姪に当らせられるカイウラニ王女に日本皇室の親王を迎へて国王の後継者となし、もつて日本政府の

勢力を入れて、米布併合運動を破らんとされたのである。

後に国王より聞くところによると、日本天皇陛下は王の懇請を御熱心に御聴き遊ばされたが、事の重大にして且つ前例のないこと故、熟考の上答ふべし、と仰せられたさうである。

われわれがハワイに帰ると、間もなく日本より特使が到来し、カラカワ王の懇請は遺憾ながら謝絶するといふ天皇陛下の御親書を捧呈した。日本とハワイとの友好関係はこの事情のため破壊されるやうなことは少しもなかったが、われわれ国王の側近者は其後の王の行動に深き注意を払ふやうになった。国王のこの計画が日本天皇陛下によつて御嘉納になつてゐたらハワイは日本領土となる経路をとるに至つたであらう。

とあつて、その主要点は、

一、会談はハワイ皇帝の方から、突然、申し出られた。

二、その内容は、アメリカのハワイ征服を未然に防ぐ為に、日本の皇室とハワイの王室の間に婚姻関係を結びたいといふ御希望であつた。

三、その後、明治天皇はこれを謝絶された。

ということであるが、この最後の部分に、明治天皇が、もし、これを御嘉納の場合は、ハワイは将来、日本の領土になつていたであらう、と記されていることである。この明治十四年は、鹿鳴館時代の前奏曲ともいふべき時代であり、日清戦争よりは十三、四年前、日露戦争よりは二十三、四年前のことで、その間には涙を呑んだ三国干渉も介在したことであつて、もし、天皇がこれを御嘉納のあかつきには、ハワイに野心満々のアメリカが、必ず、両腕を拡張して日本の前に立ちほだかり、非常な干渉、あらゆる圧力を加え、妨碍、抑圧の果は、日本との戦争にまで持ち込まな

かったであろうか。そうした場合、英、仏、露のヨーロッパ列強は必ずこれに介入し、彼我、如何ように分れ、勝敗いづれに帰そうとも、その勢力はアジアに扶植せられ、アジアは彼等の擅断に帰し、日本の命運も予測し難い事態に立ち到りはしなかったであろうか。これは不甞に終ったが、大東亜戦争には、かくの如きさまざまな微妙なる歴史が数多く伏流していたのである。

ところで、ハワイ皇帝が明治天皇との御密談の、婚姻御希望のことは、その内容に関しては具体的なことは何も存せず、また、ただそれだけのことで終ったのであったろうか。

この事に関して、大宅壮二氏は『蛙のこえ』で若干の事柄を挙げて居られる。それは、最初に「キャプテン・クック以前にそれほど色の黒くない漂着者があり、その子孫が一種族となった。潮流などの関係から、それは日本人だといわれている。」ということから筆を起し、続けてその文章は、

それよりも私たちにとって、もっと興味のあることは、この王さまが明治の初めに日本にやつて来て、日本の皇室から養子を迎えようとしたことである。ハワイ七島が統一されたのは一八一〇年で、それはカメハメハという傑物によつてなされた。その子孫のカラカワ王が、明治十四年、日本に来て、しばらく浜離宮に滞在していた。そのとき接待役を仰せつかったのが山階宮定麿王（後の元帥東伏見宮依仁親王）である。

当時まだ十五歳の、この若い王子が、たいへんカラカワ王の氣に入つた。王は或る晩ひそかに明治天皇に会見し、つぎのような申し出をしたという。

一、日本の天皇を盟主にして東洋諸国の間に同盟をつくること

一、カラカワ王には子供がないので、王姪の婿に日本の一皇族を迎え、これに王位を継承させること

一、日本からなるべく多くの移民をハワイに送ること

この話ほどの程度までが事実で、それに対して明治天皇は何と答えられたかは明らかでない。

と、『随伴記』には記されていなかったハワイ皇帝の「東洋諸国間の同盟」の提唱と、「ハワイへの移民」の懇請の二点が記されているのであるが、しかし、それらはどの程度まで事実であるのか、それは明らかではないと言っているのである。

皇帝の随行員すらもこれを知り得ず、すべてが内密裡に行われ、そのことは全く風聞、風説、或は、後人の仮託、憶説の域からは、出ないという感じであるが、皇帝の来朝に関して、これを概括して詳細に記するのが『明治天皇紀』であり、その典拠として、『同紀』の引くところは「有栖川宮帝室ニ関スル書類」「侍従日録」「当番日録」「庶務課日録」「皇后宮職日記」「内膳課日記」「熾仁親王御日記」「三条実美書翰」「井上馨書翰」「徳大寺実則書翰」などの文書類、およそ三十余种である。

布哇国皇帝の明治天皇との御密談(二)

「さらば、あなたよ」、すなわち、*「アロハ・オエ」*は、作詩、作曲、ともにハワイ王国カラカウア皇帝の王妹リリウオカラニ王女の手になるものであり、同王女は詩人として、また、音楽家としても有名で、百曲余りの作曲があるが、皇帝は、外遊不在中の摂政をこのリリウオカラニ王女に任命されて、明治十四年の正月早々、世界歴訪を公表、その途に上られた。先ず最初、その報を得たのは外務卿井上馨であった。(以下、『明治天皇紀』に拠り、それ以外は

※印を附す。

明治十四年二月二十三日、井上外務卿はアメリカ公使ジョン・エー・ピングラムからの「布哇国皇帝は微服間行、ア
リー・カルカウアの匿名で侍従長ジャッド、移住民事務長官アームストロングを従え、一月十八日サンフランシスコ
に向い、同港より東洋諸国巡遊のため横浜に進航せられたと聞く。」との内報に接し、更に布哇国外務卿が横浜の米
国総領事代に贈った書翰に由つても「同皇帝は、横浜より支那・新嘉坡・印度及び欧州を巡遊の予定で、移住民事務
長官の随従は、日本人の布哇移住に関する条約の締結を御希望の爲である。」ことを知り、二十六日、これを聞召さ
れた明治天皇は、皇帝を迎えるに国賓の禮を以てせしめられ、嘉彰親王（前記、大宅氏の文中の定曆王の兄君で御養
父。当時、東伏見宮。明治十五年に小松宮彰仁親王と改められた。）に御用掛、蜂須賀茂韶・伊達宗城等に接伴掛を
命じ、延遼館を滞京中の旅館に充てしめられた。

三月四日。朝（※七時三十分）、皇帝は横浜港に著かれ、接伴掛・海軍将官・神奈川県令等は御乗船に赴き、宮内
少輔土方久元・東海鎮守府司令長官等は鎮守府埠頭に於てそれぞれ奉迎。同夜、皇帝は伊勢山の御用邸に泊せられた。
三月五日。皇帝は午後零時二十分、嘉彰親王並びに接伴掛等驤乗の御料汽車にて新橋停車場に著かれ、親王及び大
臣・参議以下奉迎、近衛兵二小隊が儀仗兵として供奉、沿道には東京鎮台兵が堵列の中を参内。一時三十分、明治天
皇は正装の上、八景間に迎えられ、小御所代で御対顔、尋いで御座所に誘われ、親王及び大臣以下、並びに皇帝の随
員は侍立、或は扈從申し上げた。皇后もおでましになって皇帝を迎えられた。暫く御款談の後、天皇は、辞去される
皇帝を御座所の敷居際まで御送りになられ、三時に宮内卿輔・侍従長等を従えられて延遼館へ答禮に御出門、四時三
十分還幸遊ばされた。又、井上外務卿は「天皇におかせられては、外国の皇帝の訪問であるので、これを記念して観

兵式等を挙行せられる」との旨を伝え、皇帝は滞留三日の予定を延長せられた。

※同夜は延遼館で一蝶斎の手品、中島検校の音曲を皇帝は楽しまれた。

※翌三月六日は、皇帝は、午前九時に宮内省よりの御召の馬車で、上野公園で開催中の第二回内国博覧会に赴かれ、精養軒で御昼食、帰路、印刷局へ寄られ三時御帰館。夜は三曲と太神楽を御覧になられた。

※三月七日は、皇帝は、延遼館に皇族、大臣、参議、麝香間華族等を招かれた。

三月八日。天皇は、陸軍中将三好重臣指揮の近衛・東京鎮台及び教導団諸兵の觀兵式を、日比谷陸軍操練所にて皇帝と轡を並べて御覧になられた。侍従長・侍従二人が扈從、親王及び大臣・参議・各省長官、並びに各国公使・皇帝隨員等陪覽。是の日、寒威凜烈、午後、雪降る。

三月九日。皇帝、吹上御苑を御遊覽。（※『朝野新聞』は「同日、吹上禁苑へ御出あるべきの処、雪後、路次悪しく御順延になりぬ。」と報じている。）

※この日、皇帝は午前十時に海軍重砲塔に入られ、大砲の発射、海軍生徒の擊劍、乾行艦の帆前訓練などを御覧になられて、正午、御帰館。夜は午後六時より新富座で「翁」「繰り三番叟」「鍛引き」などを御覧になられ、十時過ぎ御帰館。又、この日、起癪院の後藤昌直氏は延遼館に赴き、癪病に関する皇帝の御質問に奉答などを申し上げている。

※三月十日午後、皇帝は横浜の耶蘇会堂へ赴かれ、日本人牧師数名の説教を聞かれた。

三月十一日。この日が、カラカウア皇帝の御内談を明治天皇が御聴きになられた日であるが、これは最後に記すことにする。

(三月十二日、十三日。明治天皇感冒に罹らせられて御静養。※布哇国皇帝の動静は正確を期し難い面があり、記述を控へたい。)

三月十四日。正午過ぎ告別の為に布哇国皇帝参内。天皇は正装にて迎えられ、御座所で御対面。親王及び大臣・参議・宮内卿・賞勲局副総裁、並びに皇帝の随員等侍立する中に、大勲位菊花大綬章を呈せられ、皇帝は佩用せられた。その後、天皇は皇帝と大広間の食卓に著かせられ、熾仁親王・嘉彰親王・貞愛親王・能久親王及び大臣・参議・陸軍卿・海軍卿・宮内卿・外務大少輔・宮内大少輔・式部頭・接伴掛、並びに皇帝随員等御陪食。御食事後、御座所に復御、皇后之れを迎えられた。珈琲・銘酒等を供進、特に煙草を供せられ、親王及び諸臣にも賜った。そして、天皇は皇帝に、皇后は布哇国皇后に種々の品々を御贈呈になられ、暫く御款談の後、午後三時、皇帝は辞去せられ、天皇は御座所次の間まで御見送りになられた。

三月十五日。午前十一時五十分、天皇御出門、延遼館に行幸、布哇国皇帝に別れを告げられた。皇帝は昼食を供されて御一緒に召上がられ、嘉彰親王及び宮内卿・宮内大輔・外務大輔・接伴掛、並びに随員等も陪席。午後三時、還幸。

三月十六日。午後一時二十分、皇帝は東京を御出発、四時、横浜港を御出帆。奉送等の儀は奉迎の際と同じ。皇帝は神戸、長崎を遊覧せられるので接伴掛の蜂須賀茂韶と長崎省吾を長崎まで随行せしめられた。

※この日、午前七時、皇族及び大臣・参議等、延遼館に参上、告別の辞を奏して退館。午前十一時、東京鎮台の諸兵、延遼館より新橋停車場までの両側に整列、警衛。十二時、有栖川宮、北白川宮を初め、三条、岩倉両大臣、山県、伊藤等の諸参議、宮内卿、内務卿、海軍卿、侍従長等の他、奏任官等が大禮服着用、奉送に停車場に集

合。午後一時、皇帝は禮服に天皇御贈呈の大勲章を佩用、東伏見宮、伊達從二位と御同乗、皇帝の隨行員、及び外務大輔、接伴掛等を供奉に御出門、新橋停車場から横浜まで奉送の東伏見宮を初め接伴掛、及び外務大輔、東京府知事が皇帝御召しの汽車に御同車。横浜港で皇帝は汽船に召され御出帆になられた。

以上、布哇国カラカウア皇帝來朝の際の概略、これを『明治天皇紀』を主に、当時の報道記事を従に記したが、問題は三月十一日である。果してその日、御密談が行われたのであろうか。行われたとすればそれは如何なる内容であったのであろうか。

隨行員アームストロングの『隨伴記』は御婚姻のことを記すのみであり、これを紹介した吉森氏もただ紹介のみに終り、それ以外に言及するところは何もなかった。また、大宅氏も「つぎのような申し出をしたと、いう」と言ふ不確定な前提で以て「同盟」「婚姻」「移民」の三点を挙げ、それを結ぶに「この話はどの程度まで事実で、……何と答えられたか明らかでない。」と、これは話であって、信憑性に乏しく、確証はないと断って居られるのである。

それでは、この御密談は御婚姻のことのみで、その他は、単なる憶測が永遠の謎の如くに伝えられたに過ぎなかったのであろうか。

布哇国皇帝の明治天皇との御密談(三)

否。これを明瞭、詳細に記すは『明治天皇紀』である。その三月十一日の条、文意を重んじ原文を掲げるが、読者の便宜の爲、改行、句読点、注釈など、若干の加筆はこれを諒とせられたい。

明治十四年三月十一日

天皇、布哇国皇帝の御内談を聴きたまふ。是れより先、皇帝、親しく密意を天皇に告げんことを望ませらるゝを以て、外務卿井上馨、此の旨を言上す。

是の日、午後二時、皇帝参内せらる。天皇、八景間に迎へたまひて直ちに御座所に誘ひ、茶菓を供進せしめられたる後、侍臣等を遠ざけ、馨を通訳として会談あらせらる。

〔注〕 従つて、外務卿井上馨のみが御密談の内容を知り得た唯一の人物であつた。

皇帝、先づ曰く、「明年、即位の儀を行はんとするを以て、特に、使節を御差遣ありたし。」と。

天皇、之れを諾したまふ。

皇帝、曰く、「今次、巡遊の主旨は、多年希望する所の亜細亞諸国の聯盟を起さんとするに在り。歐洲諸国は、只、利己を以て主義と爲し、他国の不利、他人の困難を顧みることなし。而して、其の東洋諸国に対する政略に於いては、諸国、能く聯合し、能く協同す。然るに、東洋諸国は、互に孤立して相援けず。又、歐洲諸国に対する政略を有せず。今日、東洋諸国が、其の權益を歐洲諸国に占有せらるゝ所以は、一に此に存す。されば、東洋諸国の急務は、聯合同盟して東洋の大局を維持し、以て、歐洲諸国に對峙するにあり。而して、今や、其の時機、方に到来せり。」と。

天皇、宣はく、「歐亜の大勢、實に貴説の如し。又、東洋諸国の聯合に就きても所見を同じくす。然れども、今や時機到れりとは、何に因りて認定せらるゝか。」

皇帝、答へて曰く、「東洋諸国は、從來、歐洲各国の圧制に苦しみ、今や、大に奮起する所なかるべからずと自覺

するに至れり。是れ、大策を施すの時機到れりと謂ふ所以なり。」

天皇、宣はく、「願はくは、其の大策を承るを得ん。」

皇帝、答ふらく、「今次の旅行、清国・暹羅・印度・波斯等の君主にも面会して、具に、聯盟の利害得失を弁説せんと欲す。然れども、弊邦は蕞爾たる島嶼にして、人口、亦、僅少なれば、大策を企画するの力なし。然るに、貴国は、聞知する所に違はず、其の進歩、実に驚くべきのみならず、人民多くして、其の氣象、亦、勇敢なり。故に、亜細亞諸国の聯盟を起さんとせば、陛下、進みて之れが盟主たらざるべからず。予は、陛下に臣事して、大に力を致さん。而して、陛下、盟主と為りて此の志を遂げんとせば、先づ、歐洲をして、治外法権を撤廃せしめざるべからず。会々、千八百八十三年には、紐育に於て博覧会開催の挙あるべし。陛下、之れを機として米國に渡航し、且つ、親王を密使として歐洲諸國に派遣し、各國君主等に勸説せしむるに、米國博覧会を機として、紐育に合せんことを以てせらるべし。斯くて、來会せる各國君主等に、治外法権撤廢の切要を、直接、説述せらるれば、必ずや其の効果あるべし。而して、帰國の後、博覧会を貴國に開き、亜細亞諸國の君主、及び、歐洲諸國の君主等を招請せらるべし。要するに、治外法権を撤廢せしめ、東洋諸國の聯盟を起すの成否は、陛下の能く勉めらるゝと否とにあるのみ。」

天皇、宣はく、「貴説を領す。但し、清國の如きは大国にして、且つ、傲慢不遜の風あり。招請すとも必ず來会せざるべし。」

皇帝、答へて曰く、「亜細亞諸國の君主が、悉く來会せんことは期し難し。然れども、暹羅國王・波斯國王・印度國諸王侯の如きは必ず來会すべし。然らば、以て、聯盟の端を發するに足らん。但し、此の事たる、一、二回の会

合を以て成就すべきにあらず。又、歐洲諸国の君主等を貴国博覧会に招請するは、彼等の嫌疑を避けんがためのみ。与に心事を談ずるは、亜細亞諸国の君主に限るべきは勿論なり。陛下、幸に予が言を領せられなば、希くは、陛下の指環を賜はらんことを。」と。

天皇、遂に宣はく、「貴説傾聴せり。然れども、我が邦の進歩も外見の如くにはあらず。殊に、清国とは葛藤を生ずること多く、彼は、常に我が邦を以て征略の意図ありと為す。既に清国との和好をも全くすること難し。貴説を遂行するが如きは更に難事に属す。尚、閣臣等に諮り、熟考して答ふべし。」と。

皇帝、之れを領承す。

御会談、一時間二十分にして終る。

尋いで、皇帝、其の写真一葉、及び、布哇国の政体を記述せる書を呈し、又、其の皇后の写真を我が皇后に贈進し、三時四十分、辞去せらる。天皇、之れを八景間に送りたまふ。

尚、皇帝は是の日、日本・布哇両国間に海底電線を敷設し、以て、国権を拡張するの必要を説明し、又、皇姪カピオラニーを定曆王に配せしめんことを切望せられたりと云ふ。蓋し、皇姪婚姻のことは、頃日、延遼館に於て海軍兵学校在学の定曆王を覽て、之れを鍾愛せらるゝに出づ。

抑々、東洋諸国聯盟の事たるや、清国が日本国の盟主たるを肯ぜざるは明かなるのみならず、暹羅・印度の如きは相距ること遠く、且つ、言語・風俗、全く同じからざるを以て望み難し。又、海底電線架設の事は、既に、米国人の請ふ所ありて、之れに補助を約せる事あり。又、外国皇室と婚嫁を通ずる事も、累を将来に及ぼすの処なきにあらず。是を以て、外務卿は、三事、皆、言ふべくして行はれ難しとせり。

(注) 移民のことは御密談では全く触れて居られない。従つて、大宅氏の「移民」の話は竄入の類であろう。以上、長きに亘つたが、布哇皇帝の明治天皇との御密談に関して、『明治天皇紀』の記すところ、右の通りであり、これを要約すれば、カラカウア皇帝は明治天皇に、

一、欧米列強の東洋侵略に対し『亜細亜諸国の聯盟』を結成すること。これは以前から自分の念願とするところであり、今回の巡遊もそれが目的であること。

二、この『亜細亜諸国の聯盟』の結成には、天皇陛下御自ら^{だんご}が盟主となられて、我々を御指導、御統率下さらねば不可能であること。その時には、自分は臣下として天皇陛下にお仕へ申し上げ、全力を傾注する所存であること。を中心に、欧米列強の侵略に対する『亜細亜諸国の聯盟』の結成が焦眉の急務であることを力説された。

これに対し、明治天皇は「すべて貴説の通りで同感であるが、これを実行するには、近隣諸国の現況より考え、非常に困難であるので、関係閣僚等と熟考の上、御返答申したい。」との旨、御返事をなされた。

又、カラカウア皇帝は、

◎ 海底電線を敷設して日本とハワイの連絡を密にしたい。

◎ 山階宮定麿王(後の東伏見宮依仁親王)の配偶者に、皇帝の姪、カピオラニー姫を娶つて頂きたい。

という二点も希望されたということである。以上の御密談のうち、御婚姻のことだけを皇帝はアームストロングに語られたのであろう。それでその『随伴記』には御婚姻のことのみが記されているのであろう。

明治天皇は、宮内権少書記官の長崎省吾の米国差遣を名目に、布哇国皇帝に勅答を伝達せしめんと思召され(皇帝は明治十四年秋、世界周遊より帰国)、翌年(明治十五年)の二月十日に、御学問所で省吾に拝謁を賜わり(この時、

親翰を省吾に託されたのであろうか）、省吾は四日後の二月十四日、横浜を出発した。

親翰の内容は『亜細亞聯邦』（親翰の御称呼による）に関する勅答のみで、他の「婚姻」「海底電線」「移民」とは外務卿井上馨が答書を作り、省吾に託した。

省吾は、翌月の三月二十二日、布哇国皇帝に謁して親翰を捧呈。皇帝は非常に喜ばれて、返翰（四月八日付）を省吾に託され、省吾は六月十二日に帰朝し、皇帝の返翰を捧呈、詳しく復命申し上げた。

天皇の親翰は一千二百四十三文字。非常に御鄭重なる勅答であつて、『亜細亞聯邦』の事業は宏大悠遠であり、その結果は予測し難く、亜細亞諸国の実情も、風土、人物、言語、人情など、それぞれ異つて居り、その領土も極めて広大な国もあることなどを述べられて、「之ヲ思ヘバ弥々遠ク、之ヲ謀ルハ益々難シ。況ンヤ、不肖、何ヲ以テ能ク盟主ノ重任ヲ負担スルヲ得ンヤ。」と、鄭重に盟主のことを謝絶遊ばされ、更に、我が国内では、政治、法制など改良を加えねばならず、来る明治二十三年には立憲政体を創立、国会議院を開設すべく詔勅を下し、輔佐の臣は日夜孜々としてその完成を期して居り、内政の状況、かくの如く煩多なる時であることを述べられ、「然ルヲ、朕、一朝之ヲ放棄シ去テ、海外萬里ノ地ニ出遊シ、力ヲ異邦ノ事ニ専ラニセントスルハ、朕ガ敢テ為スニ忍ビザル所ニシテ、是レ即チ、亜細亞聯邦ノ策ヲ以テ、之ヲ今日ニ舉行シ難シトスル所以ナリ。」と、国内多事のとき、これを放棄して『亜細亞聯邦』のことを、今、行なうと言うことは非常にむづかしいことである。が、「朕、深ク此ノ鴻業ノ将来ヲ期シテ、以テ大成ニ至ランコトヲ熱望ス。故ニ、居常、之ヲ胸裏ニ存シ、暇アレバ以テ其ノ企図ノ方略ヲ考索シ、敢テ倦怠スルコトナカルベシ。」と、『亜細亞聯邦』の実現は熱望するところであるので、そのことは常に心に留めてこれをおきたい。と仰せられたのであつた。

又、カラカウア皇帝は、その返翰の中で、西曆一千八百八十三年の二月に友邦諸国を招請して即位式を舉行し、布哇は独立国家であることを内外に表明して、明確にこれを徹底したい方針であることを述べられた。皇帝の即位は既述の如く、騒動を以て行われたのであって、不快感の残るものであった。それを九年後の一八八三年（明治十六年）に、名実ともに、盛大に舉行し直して、欧米諸国に独立国布哇の存在を認めさせようとされるのである。そして、「欧米諸國中、或は当国を占有し、太平洋上の根拠となさんとの野心を包蔵するものあり。」と、その野心を有するのはどの国であるかを婉曲に表現されながら、続いて、「英仏兩國皇帝は、夙に余の志を諒察し、敢えて当国の独立を妨害するの挙動をなさざるのみならず、進んで之れを援助すべきことを連署して証明公布せられたり。」と云つて居られることは、明らかに、ハワイを滅してこれを領有せんとする野心を有するものはアメリカであると、名指しで宣言して居られると見てよいであらう。そして最後に「移民」のことに触れられて、「貴国人民（日本民族）は、もと是れ、我と同類の人種なり。」と、非常な親密と信頼を日本に寄せられたのであった。

以上が、明治天皇の親翰とカラカウア皇帝の返翰の概要であるが、前記、井上馨の答書には、定曆王とカピオラニ姫の御婚姻は事情困難であること。日本と布哇間の海底電線は、すでに米人サイルス・フィールドの太平洋海底電線架設事業を補助するという予約のあること。移民問題は、将来、兩國の相互利益のため、条約改正に際して別に條款を設けて結約させて頂く。という三点が記されていた。

そして、カラカウア皇帝は、来朝より十年後の明治二十四年一月、肝硬変に尿毒症と脳溢血を併発されて、サンフランシスコの病院で崩ぜられた。時に五十五歳であった。

カラカウア皇帝崩ぜられた後、御子孫無き為、王妹リリウオカラニ王女が女王としてハワイ国王の位を嗣がれた。

布哇国皇帝の明治天皇との御密談(四)

先にも記したがクックの発見により、アメリカ、イギリス、フランス、ロシアなど欧米列強諸国は、貿易の促進、商工業の近代化、キリスト教の伝道などを口実に、ハワイを侵略、領有せんと企図し続けた。

ハワイ原住民の人口が十萬人を数えたのは、クックの発見より六十年後の一八四〇年、カメハメハ三世の時であった。それより僅か三十三年後の一八七二年、カメハメハ王の直系絶滅の年の国勢調査では、半数の五萬一千人に激減していた。それは前述の如く、外国人が次々と齎した各種の、悪性の病気の猖獗によるものであった。しかも、この三十三年間には、三人の国王が亡くなってその直系は断絶し、王族も殆んど死滅し、優秀な政治家や、有能な人材も多数死亡してしまった。そしてその後の新国王ルナリロも、在位僅か一年と二十五日で他界した。そしてまたカラカウア皇帝が、最大の頼みであった王位継承者レイオホフ王子も在位僅か四年で亡くなり、而して、そのカラカウア皇帝も在位十七年にして崩じたのであった。

皇帝は、チャールズ二世と同様に「愉快王」「陽気な王様」(Merry-Monarch)と呼ばれ、鉄道や電氣を開設し、又、舞踊や音楽などを好み、ハワイの近代化と同時に、その古代の文化を尊重、復活して「カラカウアのルネサンス」と称される華やかな活動をし、特に、ハワイの為の政治、経済、厚生を考えてその政策を推進し、ハワイに於ける白人、特にアメリカ人の勢力の抑制、削減を図られたが、明治二十年(一八八七)、却って、彼等の圧力に屈して彼等が強制した屈辱的な憲法に署名せざるを得なくなり、更に、太平洋の制圧を目的とするアメリカから互惠条約の修正を

強いられ、遂に、アメリカに真珠湾の絶対的支配権を認められなくなった。

カラカウア皇帝が来朝して、明治天皇を頼りに『亜細亜諸国の聯盟』の結成を密談せられたのも、ポリネシア帝国の建設を図ってサモア王に協力を求められたのも、或は、英・仏両国からの保障と援助の約を得られたのも、それらは総て、アメリカの侵略によって、まさに滅ばせんとするハワイ王国を救わんが為の悲痛なる叫びではなかったろうか。

布哇王国の滅亡

そうした累卵の危きにも似た情勢の中で、その危険性を看破し得なかったリリウオカラニ新女王は、新憲法を發布しようとして、参政権を有する白人、特に、ハワイの併合を図るアメリカ人の抵抗と策謀に遭い、「アメリカ人の生命と財産を守る。」という口実で上陸して来たアメリカ海兵隊、僅か百六十名の武力の前に、明治二十六年（一八九三）一月十七日、萬斛の涙を吞んで女王は退位され、この日を最後に再びハワイ国旗を仰ぐことは出来なかった。

ハワイに下したアメリカの根は余りにも深く、且つ、強固、頑強にして、もはや、これを抜かんにも、すでに如何ともなし難くなっていたのであった。そして、アメリカ人のドールが初代ハワイ共和国大統領となり、五年後の明治三十一年（一八九八）八月十二日、アメリカ合衆国これを併合して、その領有するところとなり、昭和三十四年（一九五九）八月二十一日、アメリカ合衆国第五十番目の州、「ハワイ州」となった。アメリカは百五年の後、その最終目的に到達したのであった。

『世界伝記大事典』（ほるぷ出版）は、「ハワイ王朝」の項に、

所詮は白人の来島、キリスト教の渡来、英・露・仏・米の勢力が侵入し、こうした欧米列強のなかで南海の弱小王国を経営するのは至難のわざで、事実はあるめきながらの独立維持であり、列強の軍事的・経済的欲望によって滅ぶべくして滅び、吸収されていった。こうした推移はポリネシア各地でも同様である。ハワイはタヒチ（こちらはフランス）とまったく同様の経過をへて、ここに亡国の典型をみる。反乱罪で幽閉されたリリオカラニも悲劇の女王なら、デュブチットアールの強圧に哭いたポーマレ四世女王はさらに悲劇の人だった。「私がどこに賠償金の壺萬ビアスターを持っているというの？」と肩を震わせて泣きながら書類に署名した瞬間に、タヒチ王国は消滅した。

と、ハワイの滅亡を、タヒチの滅亡と対比させていることは正鵠を得た記述であると思われる。

又、立教大学名誉教授別技篤彦氏は昭和六十一年十月号『正論』に

ハワイ在住のアメリカ人たちは何とかして女王を追放しようとさまざまな陰謀をめぐらしていた。……（中略）……かれらは些細な口実を設けて一八九五年一月、イオラニ宮殿のリリオカラニ女王を襲い、これを監禁、強制的に退位承諾書に署名させ、企業家ドール……（中略）……を大統領に「ハワイ共和国」というかいらい政権を樹立した。そしてアメリカ政府は一八九七年この「共和国」を相手に正式併合を企てた。そのとき女王はクリーブランド大統領あて、声涙ともにくだる長文の抗議書を送り（一八九七年七月）、その不当性を訴えたが無視された……（中略）……。

リリオカラニ女王はその後ハワイに居住してもっぱら長編の「自叙伝」執筆に没頭した（一九一七年死去）。

いっさいの経緯を多数の史料を使って記述したこの「自叙伝」が出版されたのは、漸く第二次大戦後の一九六四年である。(Liliuokalani: Hawaii's Story. 1964)

アメリカとしては歴史の「影」の部分を明らかにしたこの著書の出版は永らくその欲しないところであつたらしい。

と述べられたが、これによつてもハワイの滅亡と、アメリカ側の真相隠蔽の実態を感得することが出来るであらう。

『亜細亜聯邦』と『大東亜共栄圏』

アメリカの、ハワイ・フィリピン・ミッドウェイ・グアム・ウエーキなど太平洋の島々の領有は、如何なる意味を持つものであつたであらうか。それは、ただ単なる領土の拡張というが如きものではなかつた。特にハワイの併合は、カントロヴィチが『支那争覇戦と太平洋』に於いて、それは「合衆国の歴史上における転換点」であつたが、実に、太平洋上の、従つてまた第一に支那の来るべき争覇戦にあつて重要な支撑点を獲得し、この争覇戦が早晚ひき起すところの太平洋大戦争において最も重大な根拠地を得た。

と言つた如く、それはすでに、支那事変、大東亜戦争を想定しての前哨戦であり、アメリカのアジアに対する侵略意図を露骨に露呈したものであると言わなければならないであらう。

欧米列強の恐るべき東洋侵略の毒牙を看破したカラカウア皇帝が、明治天皇に懇願されたのは『亜細亜諸国の聯盟』の結成であつた。そしてそのハワイ王国は、皇帝の危惧の通り、僅か二代二十年で滅ぼされたのであつた。

ハワイの滅亡を眼前に見ながら、東郷元帥（当時、大佐）が、急遽、浪速艦を出動させたとは言え、当時の日本の国力では残念ながらこれを守ることは出来なかったが、しかし日本も、ハワイを滅ぼしたその同じ毒牙を相手に、半世紀以上、陰忍に陰忍を重ね、最後に大東亜戦争でこれと対決したのであった。大東亜戦争こそは、数十百年、強慾非道、残忍暴虐なる欧米列強の前に、無念の袂を絞ったタヒチのポーマレ女王やハワイのリリウオカラニ女王をも含め、滅亡、亡国の涙を呑み、搾取迫害の恨みを忍んで仆れていった多くのアジア・アフリカの諸国、諸民族の為への弔い合戦であったとも言い得るであろう。而してそれは、東洋の平和を守り、東洋の安定を図るため以外の何ものもなく、そこに掲げられた理想の旗印は「五族協和」であり、「東亜新秩序」であり、「東亜協同体」であり、「大東亜共栄圏」であって、それは、唯、明治天皇御一人の^{いもにん}みみを頼りと仰いだカラカウア皇帝が、ハワイの危機をその身に^{ひしひし}轟々と感じながら、終生、夢にまで見たであろう、あの『亜細亜諸国の聯盟』の悲願ではなかったか。

その悲願は、今日なお理想の世界として、アジアの民族は、心の底よりその実現を待望し、これに憧憬の念を懷き続けているのである。昭和五十二年五月二十八日、ビルマのバーモウ元長官が逝去され、わが国のマスコミは「ただ一人生き残っていた『大東亜共栄圏』時代の東南アジア最高指導者」と報じたが、その三箇月後の八月、福田首相（当時）がASEAN諸国とビルマを歴訪の際、これらの国々では、誰言うともなく『大東亜共栄圏』の語が囁かれたことを、時事通信社の記者がこれを伝えた。『大東亜共栄圏』の理想は、今日なほ、これらの諸国に希望と活力を与え、今もって慕い憧れ、願い求められているのである。

明治天皇を仰ぐところに『亜細亜聯邦』結成の夢があり、今上陛下を仰ぐところには『大東亜共栄圏』建設の理想があった。時こそ異れ、天皇陛下を仰ぐところ、そこには、常に、潑刺たる希望があり、雄大なる理想があり、清純

高潔なる未来があり、そして、勇断不屈の精神が旺盛したのであった。

(原文は正漢字、正仮名遣)

注(1) 明治十四年三月十九日の東京日日新聞の記載では、當時(一八八〇年頃)のハワイの内閣は次の通りである。

外務卿 カペナ 内務卿 ウイルドル 検事長 ブレストン 大藏卿 カアイイ 大警視 パーク 税關長
アレン 「チアンセロール」(官名) パリス大審院長兼判事長 耶蘇舊教大僧正 マイグレット 同新教大僧正
ウィリスであつて、「チアンセロール」はChancellor(衡平法裁判所長)であらう。

(2) 吉森實行氏の『ハワイを繞る日米關係史』によれば、この時(一八四五年)、ハワイ政府の行政部門は五部門であつて、アメリカ人によつて殆んど掌握されてゐた。それは次の通りである。

首相兼内務大臣 ジョン・ヤング 外務大臣 ロバート・ワメリー 大藏大臣 ドクター・ジャット 文部大臣 ウイ
リヤム・リチャード 司法大臣 ジョン・リコード

※リコードの後、司法大臣になつたウィリヤム・リーは大審院を設置し、自ら大審院長に就任した。

※右のうち、大藏大臣のドクター・ジャットと、文部大臣のウィリヤム・リチャードの二名はキリスト教傳道者であつた。

※一八五一年三月二十一日附ハワイ駐在アメリカ外交代表シヴァランスが國務長官ウエブスターに「フランスの壓迫に耐へかねたハワイ國王は、アメリカに國土の假讓與を申出た」ことを述べ、更に「議院の大部分はハワイ生れのアメリカ人が占め、行政部面でも司法部面(少くとも最高法廷)でも同様である」と報告してゐる。

参考文献は本文中に記したので省略するが、吉森實行氏の『ハワイを繞る日米關係史』に負ふところが多い。また『布哇王朝史』(武居熱血氏編著。大正六年にホノルルで發行)所收の、御密談に關する志賀重昂氏の講演記録も話としては面白いが信憑し難い面があり割愛した。